一

次の文章を読んで、後の**問一**～**九**に答えなさい。

A 私の手の動きは何を感じようとするかで異なってくる。外形を知ろうとするとき、表面の手触りを知ろうとするとき、手の動きは異なる。ざらつく表面のざらつきを感じるためには、痛みを生じない程度の手の圧力と速度で抵抗感を生み出しつつ、手を等速に動かすことが必要である。一方、その形を知るときには、ざらつきの抵抗を生むべくかけられた圧力は必要ない。たとえば表面のうねりを感じるためには、等速というよりむしろ、そのうねりのリズムに合わせた緩急をつけて手を動かす必要がある。このように知覚表象や知覚的意味が生命的意味によって規定されているとき、それを浮かび上がらせる知覚の過程自体がその生命的意味と切り離して考えられないものになってくる。

もちろん、同様の差は、知覚される意味が生命的意味であるときだけに限定して生じるのではない。表面の肌理（きめ）をなでる手の動きと、形をなぞる手の動きが違うのは当然である。こういう相違は、知覚される性質の相違に対応して生じる。したがって、知覚される意味に応じて知覚過程の差が生じるということは、生命的意味の看取の場合にかぎらず一般的に言える。つまり、一般的に、B 知覚される意味と知覚過程との一体性を語ることは問題なく可能なのである。

触り方の特性に応じて触覚的な感覚には論理的、客観的に無限のパターンが可能だろう。たとえばつるつるとした表面を指で規則的にたたくことは特有の触感覚を生じ、ざらつく表面をたたくことはまた別の感覚を生じるだろう。しかし C 客観的には触感覚のふたつのタイプでありうるこれらが、現実に触感覚の独立したタイプとして確立されることはない。可能な多くの感覚のなかで、ひとはヌルヌルだとかスベスベなどの有限な数の触覚的性質だけをとりたてて、触感覚のタイプとしてとりあげている。それはなぜか。そこに特別な生命的意味を見てとるからである。これに対し、つるつるした表面をたたくこととかざらざらした表面をたたくことにはとりたてて何かの生命的意味が見てとられることがないから、ひとつの特有の感覚性質と見なされないのであろう。

(1)私の生の文脈に応じて、生命的意味が見てとられる。それはまずは有用性――これももちろん生命的な意味である――であろう。だが有用・有害とは関係なくとも、生命的な意味が見てとられるものは、そのことによって(2)私の目をひく。だとすれば、生命的意味が世界に見てとられるということが知覚を可能にする前提条件――ほかの仕方で前提条件がみたされる可能性は排除できないが――である。客観的な観点からいえば、あるパターンの手の動きは何らかの触覚情報を生むことになるだろうが、知覚する(3)私にとって、そのすべてが注目に値するもの、知覚の対象とするに値するものではないのである。

このように考えてくると、生命的意味こそまず、世界のうちに知覚的意味として見てとられる資格を備えたものであり、知覚はそのような意味を見

てとるべく、それぞれ特別な仕方で組織されるということが示唆される。つまり、知覚される意味として、生命的意味は例外的なものであるどころか［　X　］で特権的なものだとさえいえよう。したがって、生のかかわり方である態勢が関与する知覚もまた、［　Y　］なものではない。

ここで示唆された生命的意味の広がりを別の観点から裏付けるコンキョ[ア]をあげてみよう。メルロ＝ポンティがすでに指摘していることであるが、あ[D]る感覚の固有の感覚性質を別種の感覚の感覚性質に適用する比喩が数多くある。このことは、生命的意味の広がりを示している。暖かい色、柔らかな音、といった比喩表現は、触覚的性質をその本来属する感覚領域ではない視覚や聴覚に適用している。このようなカテゴリーの「誤用[E]」にもかかわらず意味が理解できるのは、両感覚領域をまたぐ共通項があるからだと考えられる。それが生命的意味である。触覚的暖かさと「暖色」と呼ばれる色は、ともにひとを世界へと積極的にむかわせる衝動をカンキ[イ]する生命的意味を持つ。この意味が感覚領域をまたぐ共通項となり、「暖かい色」というような表現を意味あるものにしている。

ところで、先にも触れたように、メルロ＝ポンティは人間のうちに、思考し意志する上位層の人格的実存と、身体活動を営み知覚する下位層の身体的実存の二層を見てとっている。しかも感情を上位層の人格的実存に割り振っている箇所もある。これは(4)私が批判してきた態勢をふたつに分割する「二段階説」を擁護する議論にならないだろうか。私は態勢において知覚的下位層と感情などの上位層が不可分のものとして働いていることを強調してきたが、メルロ＝ポンティは両層が分離することの意義を強調している。彼によれば、このような分離により知覚をはじめとする身体活動は「自動化」できる。そのことによって、上位層が下位層の活動を主導することに煩わされることなく、固有の活動である思考や判断、意志活動などに専念できるのだという。感情的生活についても同様である。つまり、(5)私のなかの分離が上位層の活動にとって不可欠の役割を果たしているというわけである。しかしながらこの上下層の切れ目[F]は、私が態勢に関して批判してきたその切れ目とおなじものではないだろうか。メルロ＝ポンティの主張と私の主張とは矛盾対立しているのではないか。

佐藤義之

『「態勢」の哲学』より

問一　傍線部ア、イの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の選択肢から、それぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号はアが［1］、イが［2］。

ア　コンキョ

ⓐ あらぬコクウを眺めていた
ⓑ 筆者に掲載をキョヒされた
ⓒ 確かなショウコがないうわさ話
ⓓ マイキョにいとまがない
ⓔ カコの出来事だ

イ　カンキ

ⓐ カンソな住まい
ⓑ 証人をショウカンする
ⓒ カンワ休題
ⓓ 台所のカンキセンを回す
ⓔ 戦場からセイカンしたばかり

問二　傍線部A「私の手の動きは何を感じようとするかで異なってくる」を説明したものとして、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は［3］。

ⓐ 外形を知ろうとするときも、表面の手触りを知ろうとするときも、手は同じように動く。
ⓑ ざらついた表面を感じるためには、傷つかない程度に手を動かすことが大切になってくるし、表面のうねりを感じるためには、うねりにそって手を動かすことが求められる。
ⓒ 外形を知ろうとするときには、手をある程度の圧力を加えて等速に動かす必要があり、表面の手触りを知ろうとするときには、そうした圧力の必要はない。
ⓓ 形のうねる様子を知ろうとするときには、緩急を付けて手を動かす必要があり、表面の手触りを知ろうとするときには、一定の圧力をかけて手を等速に動かす必要がある。
ⓔ 知覚表象が知覚的意味をもたらすとき、知覚の過程自体が生命的な意味を帯びたものとして、私の前に立ち現れてくる。

問三　傍線部Bの「知覚される意味と知覚過程との一体性」とは、どのような意味か、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 4 。

ⓐ 人が現実を認識する方法と、認識において通過する感触は同一のものである。
ⓑ どのようにして知覚したかということと、知覚を通して理解された内容は、不可分の関係にある。
ⓒ 人間がものを理解することは、ものごとを体験することそのものである。
ⓓ ものごとを知覚するということは、知覚される性質の相違に応じて異なった意味を持つことになる。
ⓔ 我々が知覚することと、知覚にともなう具体的な動作には、それなりの関連がある。

問四　傍線部Cの「客観的には触感覚のふたつのタイプでありうるこれらが、現実に触感覚の独立したタイプとして確立されることはない」とは、どのような意味か、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 5 。

ⓐ つるつるした表面をなでることと、ざらざらした表面をたたくことは、まったく別の触感覚として捉えている。
ⓑ つるつるした表面をたたくことと、ざらざらした表面をたたくことは、たたくという動作から見るならば同じことを行っていることになる。
ⓒ つるつるした表面とざらざらした表面をなでることによって得られるのは別々の触感覚であるが、それを区別して捉えている人間はいない。
ⓓ つるつるという言葉とざらざらという言葉では、二つの動作から得られる触感覚の違いを十分に捉えることができていない。
ⓔ つるつるした表面とざらざらした表面をたたいて感じる触感覚は別の表現で捉えうる触感覚だが、実際には別の表現で捉えていない。

問五　空欄 X と Y に入る言葉として最も適切な組み合わせを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 6 。

	X	Y
ⓐ	生命的	楽観的
ⓑ	外形的	正統的
ⓒ	規範的	個別的
ⓓ	日常的	徹底的
ⓔ	典型的	例外的

問六　傍線部D「ある感覚の固有の感覚性質を別種の感覚の感覚性質に適用する比喩」の例として最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 7 。

ⓐ　黄色い歓声
ⓑ　そびえ立つ富士
ⓒ　一仕事終えたカラス
ⓓ　うだるような暑さ
ⓔ　グラグラと沸いているお湯

問七　傍線部E「誤用」の前後に筆者がカギ括弧を付けた理由として最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 8 。

ⓐ　カテゴリーの間違いが重大であることを強調する必要があると考えたため。
ⓑ　一見すると間違いと思えるが、必ずしも誤りとは言えないことを示すため。
ⓒ　「誤用」という言葉が強い言い方であるため、その印象を和らげたかったため。
ⓓ　本来なら「互用」と書くべき所なのに、わざと「誤用」という表記を使っているため。
ⓔ　次行の「暖色」という言葉と対比的に示そうとしたため。

問八　傍線部F「この上下層の切れ目は、私が態勢に関して批判してきたその切れ目とおなじものではないだろうか」と筆者が考えていることを説明したものとして、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 9 。

ⓐ　メルロ＝ポンティの言う二つの区別は、筆者が言う二つの区別と同じであるから、二人の意見は一致している。

ⓑ　二つの層に分かれているからこそ、思考や判断、意志活動という上位層は、下位層である身体活動と独立して活動できるようになっている。

ⓒ　筆者は知覚における上位層と下位層を不可分のものとして捉えているが、メルロ＝ポンティは別のものと捉えていて、意見が異なっていることを明確にしようとしている。

ⓓ　メルロ＝ポンティが分離するべきとしている二層は、筆者が分割するべきではないと主張する二層と同じものではないかと問題提起している。

ⓔ　メルロ＝ポンティの上位層・下位層の二層説は、筆者が態勢を二つに分割するべきだという考えを擁護するものとして考えられている。

問九　五箇所ある波線部「私」の中で、指示している対象が異なっているものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 10 。

ⓐ (1)　ⓑ (2)　ⓒ (3)　ⓓ (4)　ⓔ (5)

二　次の文章を読んで、後の**問一**～**八**に答えなさい。

生物としてのヒトの第一の特徴は二足歩行だと言われる。[X]　実は、二本足で立っていたら移動はできないのだ。クマやトラなど四本足の動物の歩行を観察すればよくわかるが、四本柱で立っていたらこの上なく安定していて移動は不可能である。前足二本のうち一本に体重をかけ、あとの一本が肩からぶら下がってはじめて自由になって前へ振り出すことができるようになる。人間の足も同じことで、安定を崩さなくては前進はできぬ。つまりヒトは一本足で立つ動物なのである。重さは常に一本の足にかかり、一方の足が腰からぶら下がり、それが振り出され、着地すると、そこへ体重が移ってゆく。Ⅰ

これを、ヒトの歩き方の基本型だとすると、これは日本国内ではめったに見ることができない。[A]私が見たこの型のもっとも美しい歩きはインドの人たちのそれであった。ガンガー河中流の釈迦成道の地ブッダガヤあたりの農村では亭々たるキョボク[ア]が並木を作る街道を、いったい何キロメートルを歩いてくるのか、人々がゆったりしたリズムで、とぎれもなく続いて来るのだが、その一人一人が実にみごとに美しい。Ⅱこれについて私は別に書いたのだが、浅黒い肌にガラ物[イ]のワイシャツに細身のズボンの男たちは、まるで杉の若木のようにまっすぐ上に伸びている。スタニスラフスキーは『俳優修業』の第二部で歩き方について書き、一日中広場で観察していて、十二、三歳ごろの少女の歩き方を見つけ、これこそ理想だと喜ぶエピソードを記しているが、[B]なるほどこれなのか、と私は目を見張った。Ⅲ実のところ、初めてこれを読んだまだ二十歳台の私は街やら学校やらで、憧れも手伝って、随分見て廻ったものだが、さっぱりナットクのいく歩きにお目にかからなかった記憶がある。

これに比べると日本人の歩き方はまるで違う。インドの、そしてヨーロッパやアフリカの人々の場合、足と言えば、腰から下全部が一つに連なって動く。[Y]　足とは腰から下全部で、その上にちょこんと胴が乗っている。ところが日本人はやや膝を曲げ腰を落として、股関節から下だけを交互に前へ振り出して歩く。こちらの足は長い胴体の下についたちょうどアヒルの水かきと同じ形である。これは本質的にシュリョウ[ウ]民族と水田耕作民族の身の支え方の違いであろう。前者において生活の基本はけものを追って走ることであり、歩くとはいわばゆっくり走ることに他ならないのに、後者においては、重いものを支えて泥沼を、腰を水平に保ちつつ足をひきぬきひきぬき歩くことが基本になる、と、しよう。Ⅳすれば、走るという動作は生活に必要ない。[Z]　日本の武術には基本的に「走る」ことはない。忍者の動作に見られるように、「走る」とはただ、速く歩くことに他ならない。

宮本武蔵の『五輪書』には、かかとに重さをかけ、爪先は軽く浮かす、と教えてある。Ⅴすぐ気づくようにこれは能の足の運びの基本と全く同じである。からだは低く沈み、すり足で動き、足跡は二本の線の上を辿るこの形と、インドの人々の爪先で地を蹴って前進する姿とは、ヒトの歩き方の

二典型と言ってよいであろうか。（　中　略　）

中井正一の『美学入門』風に言えば、日本人の足はギリシャの神殿の柱のエンタシス(注)のように運命の重さを支え耐える形であり、インドやヨーロッパの人々のそれはゴシック建築の如く天に向かって伸び上がろうとしている、ということになろうか。日本の近代劇の俳優にとって、いかなる腰の保ち方によって、舞台に美しく安定した、しかも「生きた足」を生み出せるか、C は容易なことではない。私の目には、タルコフスキーの映画『サクリファイス』の中で初老の主人公がカメラに向かってまっすぐに歩み寄り歩み去る足の美しさと、もう一方、能のシテの白足袋の運びの冴えとが二重映しになる。

日本の武術はもちろん裸足が原則である。履くとしても足袋か、あるいは足半（あしなか。かかとの部分はない草履）である。裸足の足の裏の感覚がひたと大地をとらえ、大地に応え、はずむこと。そのためには足の裏と足の指全部でしかと土をつかむことが、まずは必須のことになる。土をつかみ、放し、土に寄りそい、つき返され、爪先が吸い寄せられ D かかとが拮抗しあい、一刻ごとに受け応えがはずむ時、土と生きている足の裏の対話は、やがて全身にひろがって踊りとまでなるのである。

（竹内敏晴『思想する「からだ」』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

（注）　エンタシス――柱のほぼ中央につけたふくらみ。

問一　傍線部ア、イ、ウの漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の選択肢から、それぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号はアが 11 、イが 12 、ウが 13 。

ア　キョボク

ⓐ キョシンに耳を傾ける
ⓑ キョドウ不審な人物
ⓒ キョトウ会談を行う
ⓓ 面会をキョゼツする
ⓔ 胸にキョライする思い

イ　ガラ

ⓐ ゴヘイがある表現に気づく
ⓑ 今年はカラツユの予報だ
ⓒ カラヨウの家を建てる
ⓓ ヘイコウして走る
ⓔ オウヘイな態度をとる

ウ　シュリョウ

ⓐ リョウケンを訓練する
ⓑ タイリョウに生産する
ⓒ ホンリョウを発揮する
ⓓ サイリョウの友を得る
ⓔ リョウキョクに分かれる

問二　文中の空欄部 X 、 Y 、 Z には接続詞が入る。入る接続詞を正しく組み合わせたものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 14 。

	X	Y	Z
ⓐ	つまり	そして	だが
ⓑ	だが	だから	つまり
ⓒ	そして	また	だから
ⓓ	だが	つまり	だから
ⓔ	だから	そして	つまり

問三　本文からは、「これが歩くと言うことだ。」という一文が抜き出されている。どこに戻したらよいか。最も適切な箇所を、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 15 。

ⓐ Ⅰ
ⓑ Ⅱ
ⓒ Ⅲ
ⓓ Ⅳ
ⓔ Ⅴ

問四　傍線部Aの「日本国内ではめったに見ることができない」のはなぜか。筆者が考えている理由に最も近いものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 16 。

ⓐ 二十歳の時に街やら学校やらで随分見て廻ったが、ナットクのいく歩きにお目にかからなかったから。
ⓑ 日本人は、やや膝を曲げ腰を落として、股関節から下だけを交互に前へ振り出して歩くから。
ⓒ インドやヨーロッパやアフリカの人にとって歩くことはゆっくり走ることだが、日本人にとってはそうではないから。
ⓓ 日本国内では、農村のあたりでもゆったりしたリズムで、土と対話しながら裸足で歩く人は少ないから。
ⓔ 日本人はインドやヨーロッパやアフリカの人よりも、足がアヒルの水かきのように短いから。

問五　傍線部Bの「これ」とは何を指しているか。最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 17 。

ⓐ 十二、三歳ごろの少女の歩き方
ⓑ 腰から下全部が一つに連なって動く足
ⓒ 浅黒い肌にガラ物のワイシャツに細身のズボンの男たち
ⓓ インドのブッダガヤあたりの農村で見た人々の歩き方
ⓔ スタニスラフスキーの『俳優修業』の第二部

問六　傍線部C「容易なことではない」のはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。

解答番号は、 18 。

ⓐ 舞台の上は堅く、足を引き抜きながら歩く感覚は得にくいので。

ⓑ 舞台の上では、足の裏と足の指全部でしかと土をつかむことができないため。

ⓒ 能のような日本の伝統芸能における足の運びは、近代劇に要請される腰の保ち方と相容れないから。

ⓓ 日本人の足はギリシャ神殿の柱のエンタシスのように運命の重さを支えているから。

ⓔ 近代劇はヨーロッパから発生しており、日本人が演ずるのは難しいので。

問七　傍線部D「かかとが拮抗しあい」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 19 。

ⓐ 裸足の足のかかとで土を踏みしめ反動を味わうこと。

ⓑ 跳び上がったときに両足のかかとを空中でたたき合わせること。

ⓒ 足の裏の感覚が裸足であることで敏感になってくること。

ⓓ 爪先立ちになり、かかとを高く引き上げること。

ⓔ 重心を下げて、かかとを上げずにすり足で歩くこと。

問八　次の①～⑤のうち、日本人の歩き方について説明したものに○を、そうでないものに×をつけ、正しく組み合わせたものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 20 。

① 爪先で地を蹴って前進する。

② 腰を水平に保ちつつ足をひきぬきひきぬき歩く。

③ かかとに重さをかけ、爪先は軽く浮かす。

④ 一方の足が腰からぶら下がり、振り出され着地する。

⑤ 天に向かって伸び上がろうとする。

	①	②	③	④	⑤
ⓐ	○	○	×	○	×
ⓑ	×	○	×	×	○
ⓒ	×	×	○	×	○
ⓓ	○	×	×	○	×
ⓔ	×	○	○	×	×

三　次の文章を読んで、後の**問一**～**八**に答えなさい。

行進曲のメロディーが、風に乗って、ふわふわと揺れながら聞こえてきた。

ズンチャッチャッチャッ、ズンチャッチャッチャッ……。菜穂は膝を手で叩いてリズムを取り、子どもの頃の記憶をたぐり寄せた。ベートーベンの『トルコ行進曲』だ。

「運動会かなあ」

菜穂はソファーから立ち上がり、バルコニーの窓を開けた。よく晴れた秋空の意外なまぶしさに目を細めながら、音楽の聞こえる方角を確かめた。小学校だ。マンションの四階からだと屋上のキュウスイトウ(ア)しか見えないが、間違いない、あの方角に小学校があって、行進曲はそこから聞こえてくる。

リビングを振り向いた。「ねえ」と声をかけた。部屋からの返事はない。夫の靖彦は朝刊に――その一ページを埋めた求人広告に、さっきからずっと読みふけっていた。(A)

「散歩に行かない？」

部屋に戻ってあらためて声をかけると、それでやっと靖彦は新聞から顔を上げ、きょとんとした様子で「え？」と聞き返した。

「小学校で運動会やってるみたいだから、ちょっと見に行かない？」

靖彦は苦笑して、首を横に振った。「いいじゃない、近所だからすぐだよ、すぐ」と菜穂がうながしても、苦笑いを浮かべるだけで取り合わない。四十歳を過ぎた妻の子どもじみた思いつきに［X］顔だった。そして、疲れた顔でもあった。

「天気もいいよ、すごーく」

菜穂は大げさな口調で、目も大きく見開いて言った。「サイコーの日曜日だよ」と同じ口調でつづけ、(B)「家にいるのって、もったいないと思わない？」ともつづけた。(C)

だが、靖彦は「面倒くさいよ」と低い声で答え、また新聞に目を落とす。昨日の土曜日もそうだった。今日に負けないほどの快晴だったのに、朝からずっと家にいた。昼過ぎまでパジャマ姿のままで、服を着換えた後もリビングや寝室でごろごろとして、金曜日に買った求人情報誌を読んでいたのだった。

元気出してよ。

菜穂はため息と言葉を両方呑(の)み込んだ。

昨日も何度も繰り返したことだ。ヘタに励ますのはかえって逆効果だ。わかっている。靖彦は木曜日に人事異動の内示を受けていた。コウカク(イ)のうえに子会社に出向、さらに来年度からは転籍……到底納得のできない人事だったが、だからといって会社に辞表をたたきつけるわけにもいかない。四十代半ば――「中高年」の転職の難しさは、求人情報誌を買うまでもなくわかっている。今朝の新聞の求人欄をどんなに細かく読んでも、現実の厳しさを思い知らされるだけだろう。

「[Y]」

菜穂の本音を読み取ったように、靖彦が言った。そうそう、そうよ、元気出さないとだめよ、と勢い込んで相槌(あいづち)を打ちたいのをこらえて、菜穂はただ黙ってにっこりと笑う。とびきりの笑顔を浮かべられた、と思う。

音楽が止まった。入場行進が終わったのだろう。キン、というマイクのハウリングの音が聞こえる。「こーちょーせんせいの、あいさつです」――カンダカい(ウ)子どもの声。つづいて、オジサンの太い声。言葉ははっきりとは聞き取れなかったが、勝っても負けても全力を出してがんばることに意味があるんだから、というようなことを言っていた。

「翔太は？　部活か？」

「そう。試合なんだって」

[Z]

靖彦は新聞を閉じた。気持ちを切り替えるように、ふう、と肩で息をつき、「ちょっと行ってみるか」と言う。

「え？」

「運動会……散歩がてら、ぶらっと覗(のぞ)いてもいいかな、って」

ドライブはともかく、夫婦二人で町を歩くのはひさしぶりだった。小学校を訪ねるのも、去年翔太が卒業して以来ということになる。

外はほんとうにいい天気だった。

並んで歩きながら、翔太の話をした。

靖彦は「あいつ、補欠でもつづけるって言ってるのか」と訊(き)いてきた。

「それはそうでしょ？　ずっとがんばってきたんだから」

菜穂は当然のように答えたが、靖彦の相槌(あいづち)は歯切れが悪かった。試合に出られないのならチームにいても意味がないだろう、だったらそろそろ勉強

に本腰を入れて、あいつは英語が苦手なんだから受験勉強はいまのうちから始めても早すぎることはないんだし……そんなことをぼそぼそと言って、足を速める。

言い返したいことはいくらでもあった。だが、菜穂は黙って靖彦のあとを追う。いまはなにを言ってもしょうがない。一生に一度あるかないかのつらさを味わっているんだから、と自分に言い聞かせた。

実際、悔しいだろうと思う。コウカクや出向に価(あたい)するような失敗をしてしまったわけではない。目端(めはし)は利かないが、勤勉に、実直に、課長の仕事をつとめてきた。ただ、人事抗争のあおりを受けただけのことだ。

（重松清「よーい、どん！」による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

問一 傍線部ア、イ、ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の選択肢から、それぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 21 、イが 22 、ウが 23 。

ア キュウスイトウ

ⓐ 恒例のトウロウ流しが行われる
ⓑ 飛行機のトウジョウ券
ⓒ キンジトウを打ち立てる
ⓓ 新しくできたビョウトウ
ⓔ シントウを結成する

イ コウカクの

ⓐ 失敗はセイコウのもと
ⓑ 戦わずにコウサンする
ⓒ これまでのごコウジョウに感謝します
ⓓ コウシ戸を開ける
ⓔ コウラクの季節をむかえた

ウ カンダカい

ⓐ 船のカンパンに上がる
ⓑ カンサンとした商店街
ⓒ 洗濯物をカンソウさせる
ⓓ カンゲン楽団に入る
ⓔ サバのカンヅメを買う

問二　傍線部Aのような行動をとっている理由として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、24 。

ⓐ 昨日の夫婦喧嘩（げんか）で機嫌を悪くしているため。
ⓑ 毎朝新聞を隅々まで読むことが昔からの習慣であるため。
ⓒ 現在の立場に不安を感じており転職の可能性を探っているため。
ⓓ 今の給料に不満があり他社の待遇を調べているため。
ⓔ 外出する予定もなく暇を持て余しているため。

問三　空欄 X に入る表現として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、25 。

ⓐ あきれた
ⓑ 怒っている
ⓒ 悲しんでいる
ⓓ うれしそうな
ⓔ 笑いそうな

問四　傍線部B・Cのような行動をとっている理由として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、26 。

ⓐ どうしても運動会を見に行きたいため。
ⓑ 二日連続で外出しないことに耐えられないため。
ⓒ 思いついたことを実行しないと気が済まないため。
ⓓ 夫の気持ちを切り替えるきっかけを探しているため。
ⓔ 夫の態度に強い不満を感じているため。

問五　空欄 Y に入る表現として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、27 。

ⓐ　散歩に行こうかなあ
ⓑ　運動会が見たいなあ
ⓒ　元気出さなきゃなあ
ⓓ　仕事探さなきゃなあ
ⓔ　どうしようもないなあ

問六　Z に次に示す（1）～（4）の文を並べ替えて入れるにはどのような順序で並べたらよいか、最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、28 。

（1）　出がけの様子ではあまり自信はなさそうだった。
（2）　一人息子の翔太は、中学のサッカー部でレギュラー争いの真っ最中だ。
（3）　今日はどうだろう。
（4）　夏休みに三年生が引退した時点では新チームの左サイドバックで「当確」だったが、二学期が始まった頃には「当落線上」になり、先週の練習試合ではベンチスタートになってしまった。

ⓐ　（1）→（2）→（3）→（4）
ⓑ　（2）→（1）→（3）→（4）
ⓒ　（2）→（4）→（3）→（1）
ⓓ　（3）→（1）→（4）→（2）
ⓔ　（3）→（4）→（1）→（2）

問七　傍線部Dのような行動をとっている理由として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、[29]。

ⓐ 説得に二日もかかるほど分かりの悪い夫をたしなめるため。
ⓑ 休日の貴重な時間を奪われてしまったことに対する怒りを静めるため。
ⓒ 言葉を発することで夫にプレッシャーをかけてしまうことを避けるため。
ⓓ 散歩に行きたいという本音を理解してもらうことができ安心したため。
ⓔ 夫婦喧嘩（けんか）で気まずくなったときにはいつもそうしているため。

問八　傍線部Eのような行動をとっている理由として**適切でない**ものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、[30]。

ⓐ どんなに頑張っても報われないことがあると感じているため。
ⓑ 補欠であれば部活を続ける意味がないと考えているため。
ⓒ 息子の勉強の様子が気になっているため。
ⓓ 受験の準備は早くから始めたほうがよいと思っているため。
ⓔ 英語の勉強を頑張ることで何事にも挑戦できる力をつけて欲しいため。